

自分の身は自分で守る幼児を育てるための災害安全指導の工夫 ～こんな時どうする？を考え、素早く動ける幼児の育成～

江東区立大島幼稚園

主題設定の理由

ほとんどの幼児が高層住宅に住み、エレベーターや自転車で移動する生活に慣れている。そのため、4月当初は、階段の昇り降りにぎこちなさが見られたり、避難時に歩く間隔が空きすぎたりし、避難に時間がかかる姿があった。自分で自分の身を守るためにすばやく避難できるように、滑らかな身のこなしができる、体幹のしっかりととした幼児を育てたいと考え研究1、2年次は、運動遊びを通して体作りに力を入れてきた。

その結果体力はついてきたが、友達の動きにつられるなど状況判断が難しい幼児もいる。そこで今年度は、災害時「こんな時どうする？」を考え、素早く行動できる幼児を育成するための教材の選び方や環境の工夫、教師の援助について明らかにしていきたいと考え、主題を設定した。

＜災害安全指導の工夫を推進するための3本の柱＞

資料1,2

講師・消防署の方からのレクチャーを受ける

- ・本園地域の災害時の危険性について
- ・避難時の注意点
- ・防災リュックの中身の見直しなど

滑らかな身のこなしのできる幼児の育成(1年次)

体幹のしっかりととした幼児の育成(2年次)

こんな時どうする？を考え、素早く動ける幼児の育成(3年次)

- ・「基本の動き36」を参考に、いろいろな動きを取り入れた運動遊びの充実
- ・瞬時に判断して動くことを楽しむ運動遊びの充実
- ・研究保育、事例検討を通しての分析、考察

資料3

レクチャーを受けての訓練の見直し

- ・どのような訓練が必要か
- ・いろいろな場面の想定
- ・教師の意識の向上
- ・園内にいる保護者も訓練に参加

避難時に必要な動きの獲得

必要な動きを取り入れた体幹体操・防災ジャンケン

資料4

親子で防災ワークショップ

- ・防災食作り
- ・タンカ体験
- ・新聞紙のスリッパ作り
- ・紙のお皿作り
- ・ロープ結び
- ・三角巾の使い方
- ・AED講習会等

安全に素早く動ける幼児を育てるための指導の工夫

運動遊び・ダンス
歩くことの推奨
判断して動く

歩くことの推奨

- ・クローバーリーダーの育成
- ・図書館訪問、買い物、遠足など、歩くことを計画的に年間計画に位置づける

第一大島小学校の研究授業・協議会に参加

区幼研実技研・園内に講師を

招いて研修会

アウトドア流防災ガイド

あんどうりす先生

講師を招いての防災講演会

鎌倉女子大学講師
板橋区教育委員会教育専門員
矢崎良明先生

講師・消防署からの指導

資料1

<大島幼稚園地域の災害時の危険性>

大地震

- ・園舎の倒壊の危険性は少ない。
- ・室内など園舎の中ものが倒れることが予想される。
- ・木造住宅密集地域から火災発生、飛び火の恐れもあり。

水害

- ・津波の危険率は低い。
- ・河の氾濫の方が危険率は高いと思われる。
- ・橋を越えて避難しない。

火事

- ・石油所が近いため、ガソリンの臭いがした場合は危険である。
- ・木造住宅密集地域から火災発生、飛び火の恐れもあり。



<園内の安全について>

- ・棚等の転倒防止策をとる。
- ・避難経路をふさがない。
- ・押し戸より引き戸の方が安全。
- ・集合場所は園庭の真ん中がよい。
- ・キヤスター付き棚はストッパーを付ける。
- ・ガラス、鏡は破壊する恐れがあるので近寄らない。
- ・高い所に物を置かない、落ちてこないよう止める。

<防災リュックの中身について>

- 入れておいた方がよいもの
- ・アルミシート・合羽・ビニールシート・飴・ビニール袋・ゴミ袋・ロープ・着替え・カイロ・油性ペイン・白ガムテープ・ヘッドラップなど。
- ・リュックの中身を分担して持つことも一案。
- ・軽いものは年長児に持たせても良い。
- ・笛は常時身に付けておく。

大地震

- ・余震があるという前提で行動する。
- ・電気、ガスの元栓は閉めてから避難する。
- ・1・2階への避難場所はどちらでも良い。

水害

- ・津波の危険率は低いので、落ち着いて避難する。

火事

- ・石油所が近いため、ガソリンの臭いがした場合は、石油所の側は通らない。
- ・風向き、風上、風下などを見極めたり、方角が分かたりするようになること。
- ・狭い道などはブロック塀や窓ガラスなどの落下物に注意すること。
- ・上方をよく見て落下物の危険性がないかを判断すること。

共通して大切なこと

- ・ガラスなどを踏んで怪我をするのを防ぐため、履物は履くこと。
- ・ブロック塀や窓ガラスなどの落下物を避けたため、広い道（大通り）を使うこと。
- ・狭い道などはブロック塀に注意すること。
- ・上方をよく見て落下物の危険性がないかを判断すること。
- ・防災頭巾を忘れないこと。
- ・保護者への連絡はメールだけではなく、門前にも避難先を掲示し、避難場所が移動しても保護者に伝わるようにすること。

<避難時に必要な動きは・・・>

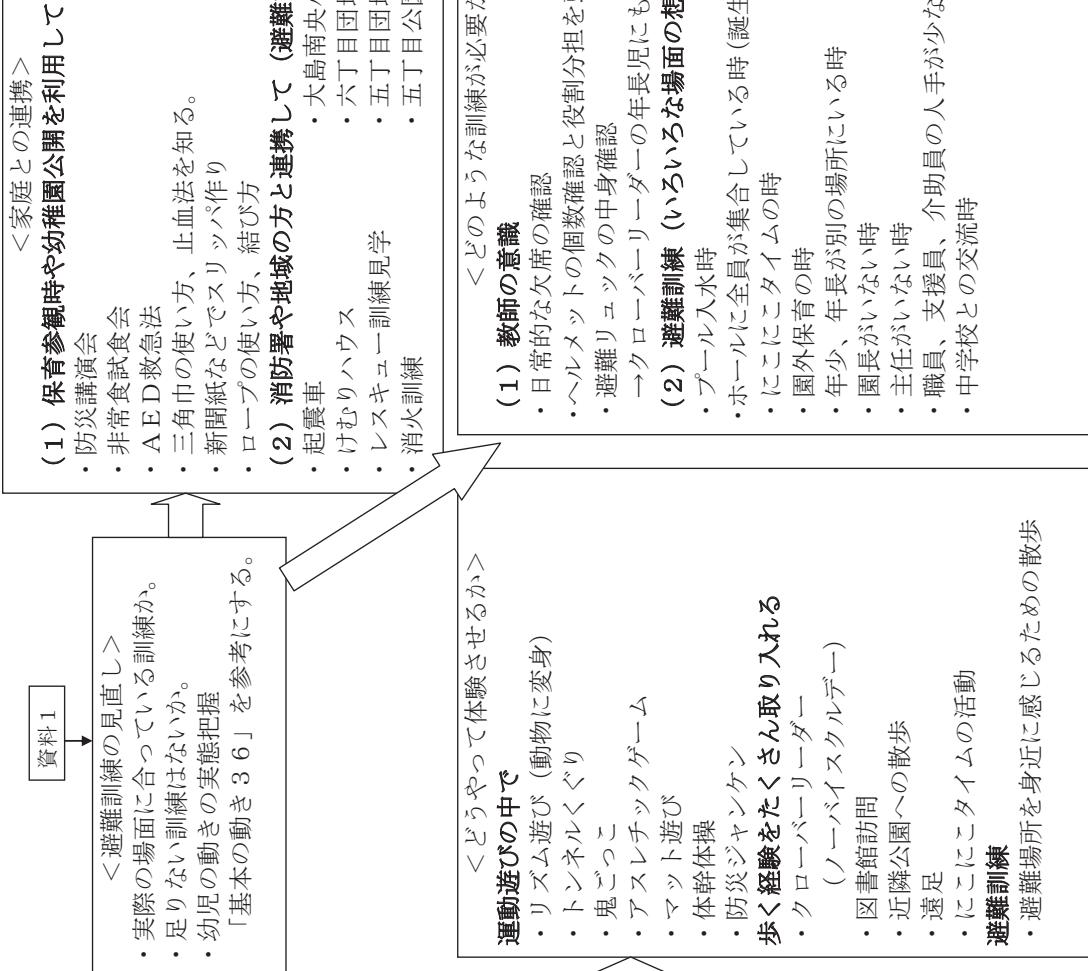
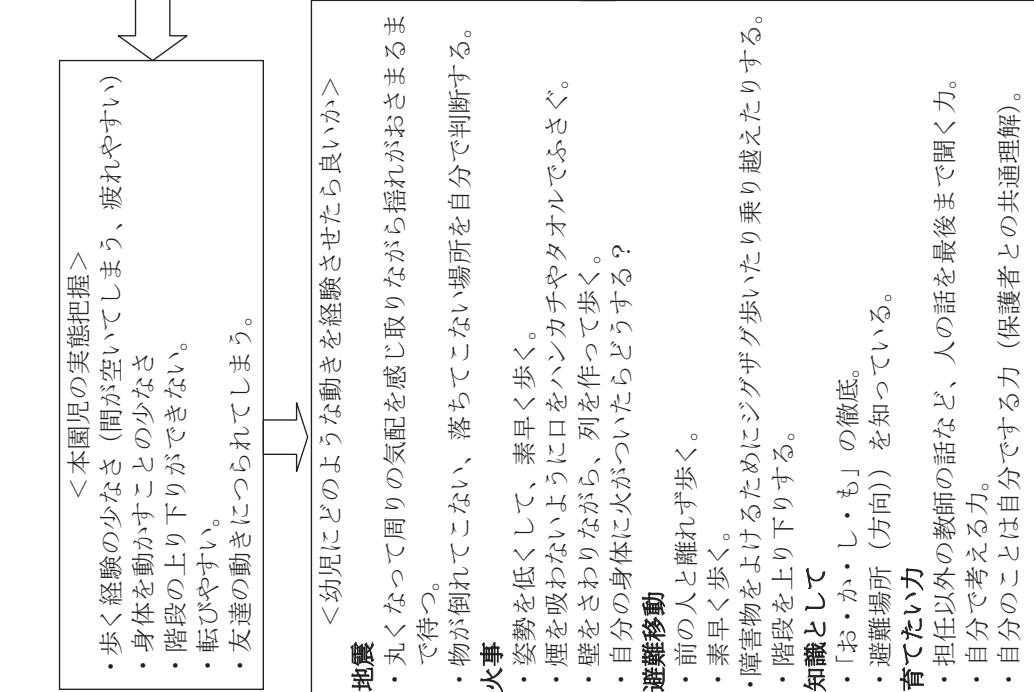
- ・丸くなつて周りの気配を感じ取りながら揺れがおさまるまで待つ。
- ・テープルの脚をもつ。
- ・しゃがんで歩く。
- ・煙を吸わないよう、ハンカチ等で口をふさぐ。
- ・壁をつたつて前へ進む。

火事

- ・誘導灯の意味を知る。（避難口を分かるようにする。）
- ・列を作つて歩く。
- ・前の人と離れず歩く。
- ・階段を素早く昇降する。
- ・すぐに靴を履く（立つて靴を履く）。
- ・障害物をよけて歩く。

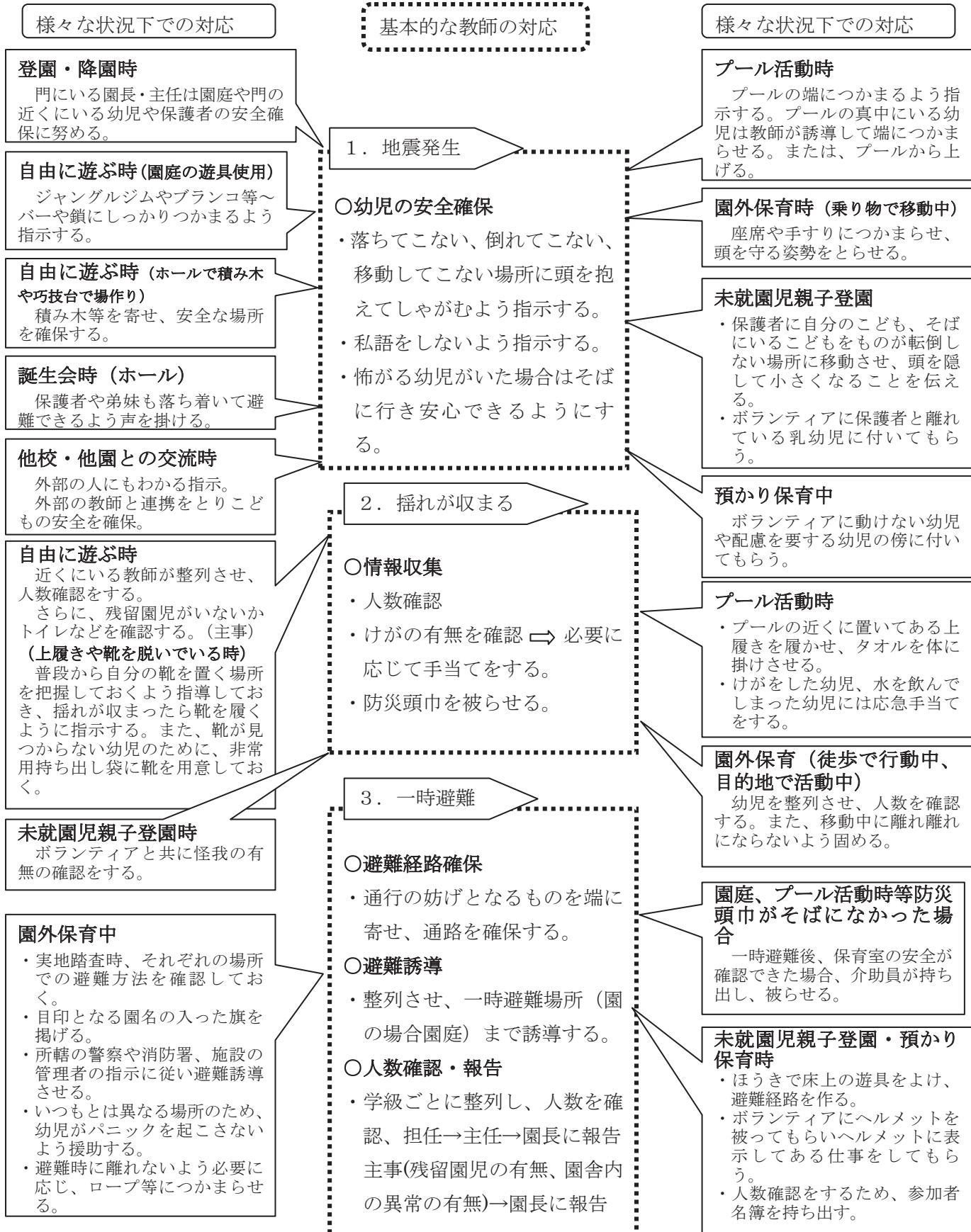
<避難時の注意点>

講師・消防署からの指導を受けて



資料3

避難マニュアル「震度5強」を想定した様々な状況下での避難（一時避難まで）



親子で防災ワークショップ

親子でスタンプラリーをしながら、防災について学びました。(平成 26 年度)

親子で防災スタンプラリー

なまえ _____

紙でお皿作り	新聞紙 スリッパ	ロープ結び
非常マークを探せ	三角巾体験	
防災食作り	タンカ運び体験	

<紙でお皿作り体験>



<新聞紙スリッパ作り>



<ロープ結び体験>



<三角巾体験>



<タンカ運び体験>



<防災食作り>

「家庭にある身近な食材で」

「子供が喜ぶ」「簡単」をキーワードに保健所の方から、防災食の作り方を教えていただきました。

缶詰を使って、作ってみよう

<用意するもの>

カットトマトの缶詰	1/2 缶
サバの味噌煮缶	1 缶
カレー粉	大さじ 1
中濃ソース	大さじ 2

<作り方>

ボウルに材料を入れ混ぜる。
ご飯にかけていただく。

平成 28 年度防災ワークショップ

- ・毛布だけでタンカ作り
- ・三角巾体験
- ・A E D 講習
- ・防災食作り

安全に素早く動ける幼児を育てるための指導の工夫

安全に素早く動ける幼児の育成を目指し、体を動かす活動などを通して以下の3点に取り組んだ。

- ・歩くことの推奨：自分で避難することができる体力や歩く力につける
- ・滑らかな身のこなしができ、体幹のしっかりととした幼児の育成：障害物を避けたり、でこぼこの道を転ばないように歩いたりして、素早く避難できるような体をつくる
- ・「こんな時どうする？」を考え、素早く動ける幼児の育成：瞬時に判断して行動できるような力をつける

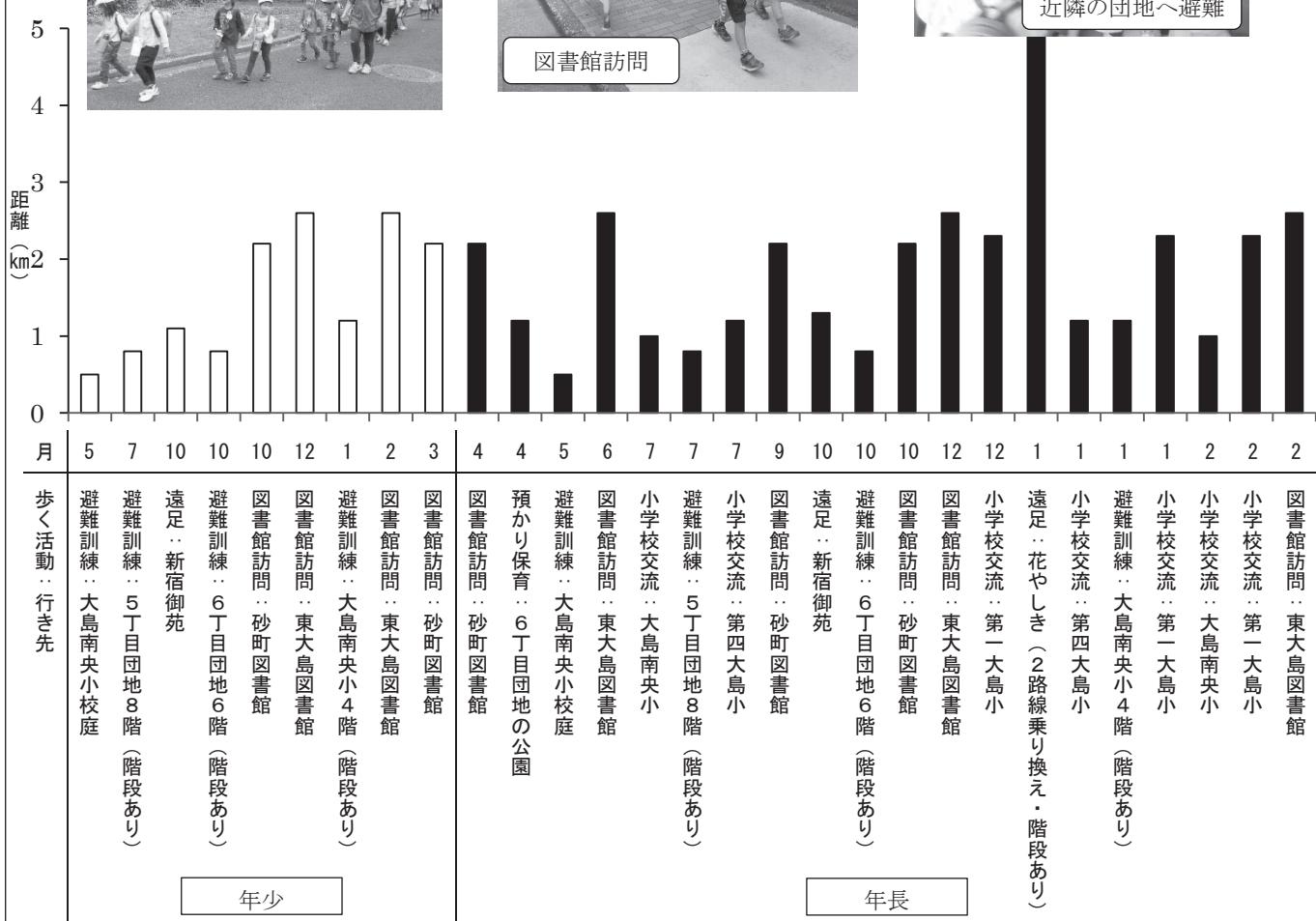
1. 歩くことの推奨

自分の身は自分で守るために、まずは自分で避難できる体力や歩く力が必要だと考えた。

そこで毎日の登降園時に、交通ルールを守り歩いている幼児を「クローバーリーダー」に認定し、幼児や保護者が意欲的に歩いて登降園できるようにした。

また、遠足や図書館訪問、近隣の公園への散歩、避難訓練での近隣の団地への避難など、歩く活動を年間計画に位置づけ、歩く経験が積み重ねられるようにした。

～2年間を通した歩く活動～



2 滑らかな身のこなしができ、体幹のしっかりとした幼児の育成

入園当初、歩いて登降園する体力がなかったり自分の荷物を自分で持って歩いたりする経験が少ない幼児が多くいた。また、体を動かすことに消極的な幼児が数名いた。ボール投げ、両足跳び、体支持、25m走の体力テストでは個人差が大きく見られた。

教師は、体を動かすことに消極的な幼児が興味をもっていたダンゴムシになった気持ちで動けるように環境を設定した。また、災害時、がれきなどの障害物などを避けて、でこぼこの道を転ばないように歩いて避難する経験ができるようにしていきたいと考えた。そこで体のいろいろな動きを知ることができるような活動を取り入れた。

(1) ①活動名 運動遊び『ダンゴムシの探検』 年少4歳児 5月

②目標 いろいろな体の動きを知る。

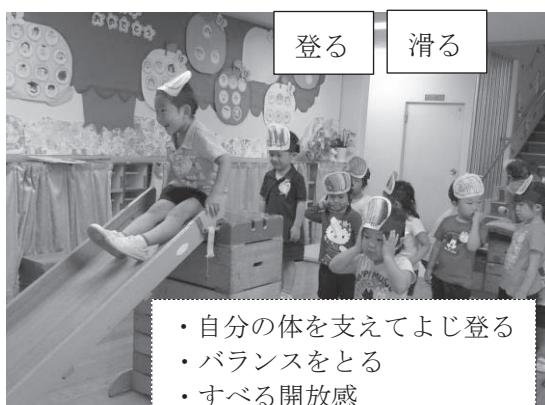
③目標に迫るための指導方法の工夫

- 日々の遊びの様子から幼児の興味があることを取り入れる。
- 活動していく、楽しいと感じられるようにする（お面をつける、音楽を流す、目標物に音が出るものにつける、など）。
- 「こんな動きもやってみたい」と思えるように、「基本の動き36」（出典：山梨大学教育学部長・大学院教育学研究科長 中村和彦教授）を基に、様々な動きができる場を設定する。
- 教師は友だちのしていることに興味がもてるような声掛けをする。
- それぞれの活動に安全に取り組めるように約束事を確認する。

④活動の様子

基本の動き

経験していること



- ・跳ぶタイミングを図る
- ・不安定な場所でバランスをとる
- ・踏み切る、膝を曲げて着地する

- ・思いきり引っ張る
- ・まっすぐ走ろうとバランスをとる



- ・高さを自分なりに選んで挑戦する
- ・膝を曲げて着地する
- ・目標物を目指して跳ぶ

(2) ①活動名 『だるまさんが ころんだ』 年少4歳児 9月

②目標 合図を聞いて、動いたり止まったりする。

③目標に迫るために指導方法の工夫

- ・通常のだるまさんがころんだの応用。(線路の中を進んだりフープをよけて進んだりする)。

④活動の様子

基本の動き

経験していること



- ・言葉に合わせて動く楽しさやスリル感
- ・合図を聞いて動きを止める
- ・動きを止めて姿勢を保つ
- ・瞬時に判断する

幼児が自ら様々な運動遊びに取り組むためには、以下の3つの大切な環境設定のポイントが分かった。『イメージがもてるような環境』『ちょっと難しいと思える環境』『選べる環境』である。

(3) ①活動名 運動遊び『動物の探検』 年少4歳児 2月

②目標 動物になりきって様々な動きに挑戦する。

③目標に迫るために指導方法の工夫

- ・自分なりに挑戦したり試してみたりできるような環境を設定する。
- ・イメージがもてるような環境を設定する。
- ・ちょっと難しいと思える環境を設定する(坂の傾斜を徐々に高くする)。
- ・自分で選べる環境の設定をする(一本橋の高さ、ロープの長さ、踏み台の高さ、など)。



④活動の様子

基本の動き

経験していること

A

登る

這う

掴む

滑る

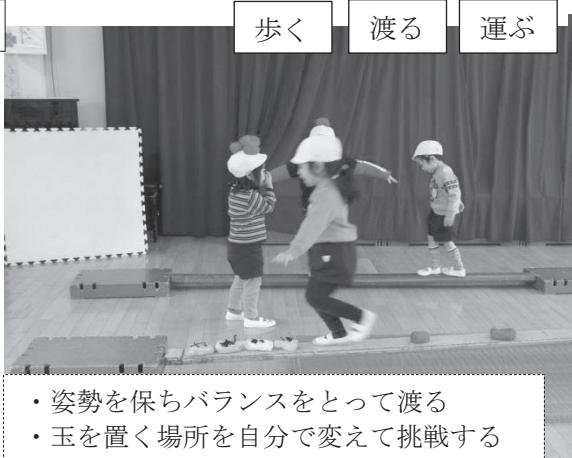


B

歩く

渡る

運ぶ



C

登る

掴む



＜イメージがもてるよう
工夫した環境＞

- A 坂の上にりんごがついたタンバリンを用意する。
- B あたったらゲジゲジになるという玉を置く。
- C ロープの上にパイナップルがついたタンバリンを用意する。

3 「こんな時どうする？」を考えられる幼児の育成

(1) ①活動名 運動遊び『探検ごっこ』 年長5歳児 5月

②目標 自分なりに考えて、試したり挑戦したりする。

③目標に迫るために指導方法の工夫

- ・年少時の研究で分かった、『イメージがもてるような環境』『ちょっと難しいと思える環境』『選べる環境』を基に設定する。
- ・『こんな時どうする？』を考えられるような環境を設定する。

体力がつき様々な動きもとれるようになってきた。災害時、大人が常にそばにいるとは限らない。自分の身は自分で守るために、「こんな時どうする？」を考えて動けるような活動を取り入れていくことが必要だと考えた。

④活動の様子

ミッション

経験していること



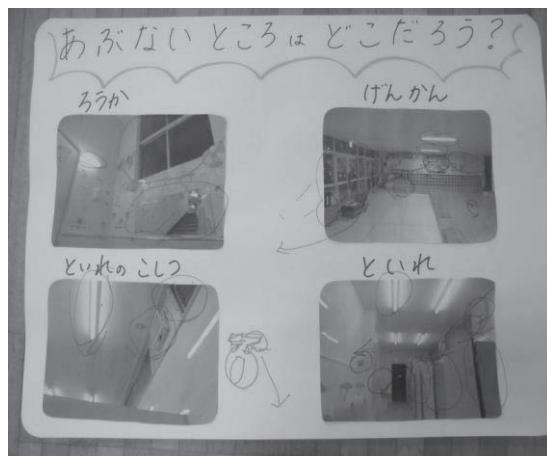
- ・身の回りにあるものを利用して渡ろうとする（中央に積み木を置き踏み台にするなど）
- ・自分の体のいろいろな部分を使って渡る

振り子の玉をよけながらどう進む？



- ・玉の動きを予測して進む、止まる、身をかわす
- ・瞬時に身をかわす

- (2) ①活動名 『こんな時どうする?』 年長5歳児 12月
- ②目標 自分なりに考えたり友達の意見を聞いたりし、危険を予測し避難方法を考える。
- ③目標に迫るための指導方法の工夫
- ・保育室や園庭以外に危険だと思われる場所を学級で話し合う。
 - ・共通のイメージがもてるよう園内で危険だと思われる場所の写真を用意する。



<教師と幼児の会話のやり取り>

教師：「廊下や階段はどんな危険があるかな？」
 幼児：「鏡があるよ！」「大きな窓もある！」
 「もしかしたら幼稚園の中で一番大きな窓かもしれないね！！」
 「大きく揺れたら階段から落ちてしまうかもしれないよ！！」
 教師：「そうだよね。落ちないように手すりに掴まるか、小さくなつて頭や身体を守らないといけないよね」
 教師：「トイレの個室にいる時はどうする？」
 幼児：「窓がある！」「換気扇もある！」
 「電気もあるよ！」「熱いかな？」
 「掴まるところがないね！」
 「便器のレバーに掴まつたらどうかな？」
 教師：「いろいろなことが考えられるね」

<経験していること>

- ・危険だと思われる場所や状況を想像する
- ・友だちの意見を聞いて刺激を受け、さらに考える
- ・どのような避難方法があるかを考える

4まとめ

- ・避難訓練については、例年通りとするのではなく、その時の幼児の実態や地域の状況を踏まえて想定を変えていくことが必要である。また、教師自身がいろいろな災害に対しての知識を深めていくことも重要である。
- ・避難訓練時、放送の合図で動きを止め、素早く行動できるようになった。また、片道約1.5kmの図書館まで荷物を持ち、約30分で歩けるようにもなった。これは、2年間歩くことに力を入れ、体幹体操や運動遊びに取り組む経験を積み重ねてきたことで、身のこなしが滑らかになり体幹が鍛えられたからであると考える。
- ・自分で考えて行動するには、教師が様々な教具や教材、用具を用意し経験させたい動きが幼児から自発的に出るような環境を設定すること、十分な時間を保障することが大切である。
- ・防災ワークショップや防災講演会に参加し、大人が自分の身を守り動けることが子どもの命を守ることにつながると気付いた保護者が多かった。保護者の意識を高めるには、講演会後に実際に体験できる機会が効果的である。
- ・今後も教師は災害や防災の情報を取り入れ、地域や保護者と連携しながら、災害安全教育をさらに充実させ、継続していきたい。